

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

『幼年倶楽部』 「軍神につづく横山少年團」に関する一考察：
戦時下児童文学における棕鳩十（久保田彦穂）の表現

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2023-03-24 キーワード (Ja): 棕鳩十, 戦時下児童文学, 表現, 母 キーワード (En): 作成者: 阿部, 奈南 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://doi.org/10.18956/00008072

『幼年倶楽部』「軍神につづく横山少年團」に関する一考察

— 戦時下児童文学における椋鳩十(久保田彦穂)の表現 —

阿 部 奈 南

要 旨

椋鳩十は、戦時下で多くの動物文学を発表し、戦争とは一線を画した作家として認識されてきた。その一方、動物文学以外のジャンルで戦争協力につながる二作品を執筆していた。その一つが『幼年倶楽部』昭和19(1944)年1月号掲載のルポルタージュ、「軍神につづく 横山少年團」である。

少年たちがお国に命を捧げることを称揚する内容であり、戦争協力の作品であることは間違いない。しかし、戦後に自身の作家としての矜持を述べた文章には、椋が「(戦時下で)自分の思うことを、こういう時代に、書ける方法」を考えていたことが示されている。従来、この「方法」は動物をテーマとしたことに限定して捉えられている。しかし、このルポルタージュを執筆するにあたり、椋はその「方法」を模索したと考えられる。その一つが「母」についての表現である。

本論文では、椋がルポルタージュの中で、取材した内容をどのように表現したか分析、検証し、再評価する。

キーワード：椋鳩十、戦時下児童文学、表現、母

はじめに 「非戦の作家」椋鳩十の「戦争協力」作品

児童文学作家椋鳩十(1905-1987)は、戦時下において数々の動物文学を発表した。お国に命を捧げることを称揚する文言が社会にあふれる中で、椋は動物たちの生き抜こうとする姿を、あえて主題に選んで描こうとした。国家を背負って戦争するのは人間だけであり、動物の世界では「戦争」の概念が存在しない。作家としての「非戦」のスタンスは、戦後に椋が自身の作品について述べたいくつもの文章に示されており⁽¹⁾、その中で「(戦時下で)自分の思うことを、こういう時代に、書ける方法」を考え、動物の物語を通して「動物の習性にことよせて、戦地、すなわち死に向かって、召されていく若者の背後に何があるか。ということ、動物の母子の深い愛情で暗示しようと思った」と述べている(椋 1978 31頁)。

論者は前稿(阿部 2018)で、その一つ、「嵐を越えて」(昭和16年『幼年倶楽部』五月号掲載)を取り上げた。この作品は、椋が戦時下で発表した動物文学の中で唯一、軍艦や水兵、出征軍人の家族が登場し、戦時色を帯びたものである。そのような設定の中で椋が、「戦意高揚」

の世の中とは別の方向での命のありようを一羽の燕の生きざまをとおして描こうとしたことを、作品の構成や表現から読み解いた。

「嵐を越えて」の主人公は、遠い南方から日本へ旅をする燕である。隼の襲撃で重傷を負って日本海軍の軍艦上に落ち、水兵たちに手当されて日本への旅を続け、古巣のある家（出征軍人の旗が掲げられている）に到着する。飛び立つ燕に、水兵たちはそれぞれの郷里（の家族）への思いをこめて言葉をかけ、それを受け止める形で出征軍人の母が登場し話を閉じる。椋はしばしば動物の母子を登場させるが、この作品では大きな物語として母子の物語に収斂させ、母の「静かな聲」という表現により、戦意高揚とは別の方向へ作品を導いている。つまり、戦時下に椋が発表した動物文学21作品（うち、大日本雄辯會講談社『少年倶楽部』、『幼年倶楽部』掲載は17作品）はすべて、命を全うすることを力強く歌い上げ、戦意高揚とは一線を画す。

その一方で、椋は、動物文学とは異なるジャンルで戦意高揚を目的とした作品も執筆していた。椋文学について論じた、長谷川潮（長谷川1984、1999、2000）、鈴木敬司（鈴木1988、2006）、鳥越信（2005）、内山三枝子・棚橋美代子（内山・棚橋 2009、2012）が指摘した、童話「太郎のかた」とルポルタージュ「軍神につづく横山少年團」である。ともに掲載誌は大日本雄弁會講談社が発行する『幼年倶楽部』で、「太郎のかた」は昭和17（1942）年6月号（17巻6号）、「軍神につづく横山少年團」は昭和19（1944）年1月号（19巻1号）に掲載された。この二作品に動物は全く出てこない。

「太郎のかた」では、主人公の太郎がお使いに行きながら機関銃を撃つ真似をするシーンが挿入され、演習のためこの地を訪れ民家に分宿する兵隊を迎える高揚感が描かれる。そして、兵隊（太郎の家に泊まった三人のうち年長の一人か）と風呂に入って、『……今、日本が、ぐんぐん大きくなってゐること、学校でをそはつたはずだね。どうかな、大きな日本が、このかたで、かつがれるかしら……』と軍国主義の下に植民地を広げていく日本を支えるべく強くなるよう励まされる。この「太郎のかた」を読者の子どもたちに知られたペンネーム「椋鳩十」で発表した椋だが、「軍神につづく横山少年團」については、本名の「久保田彦穂」で執筆している。

本論ではこのルポルタージュ「軍神につづく横山少年團」を取り上げ、その表現などについて考察し、椋が前述の「自分の思うことを、こういう時代に、書ける方法」を「軍神につづく横山少年團」で放棄していたのか検証する。

この論考で底本として用いた大阪国際児童文学館所蔵『幼年倶楽部』昭和19（1944）年1月号は、92ページの「みなさんのおたより」欄の1ページ目までは残存しているが、93ページ以降の編集部からのコメント、「二月號ノオシラセ」・「御家庭の皆様へ」欄、奥付、裏表紙などは欠損している。

なお、作品名や本文などの引用に関してはできるだけ本文に即して旧漢字を用いたが、文章作成に用いたソフトの関係で一部新字体を使用した。

1 ルポルタージュ「軍神につづく横山少年團」について

「軍神につづく横山少年團」は、大日本雄辯會講談社（現 講談社）が小学校の中、低学年向けに発行していた『幼年倶楽部』の昭和19（1944）年1月号に掲載されたもので、軍神横山正治の名を冠した少年団の活動のルポルタージュである。

昭和16（1941）年12月8日の真珠湾攻撃で特殊潜航艇に乗り戦死した九名は、国家から「九軍神」と称揚された。その一人である横山正治少佐の出身地、鹿児島県鹿児島市下荒田町において、昭和17（1942）年に彼にちなんだ少年団が創設された。その活動を報告するのが、この「軍神につづく横山少年團」である。

横山少年団の団員数は作品中には全く書かれていないが、結成された年の8月1日に横山正治の生家を訪問した東京青少年団軍神敬頌団の団長、脇田新之助が讀賣新聞の8月6日夕刊に寄せた文章⁽²⁾に、「その名も床しい横山少年團二百余名が生家の前に整列してわれわれを迎へ（夕刊2頁）」とあり、相当数の団員がいたと思われる。

当時鹿児島市に近い鹿児島県始良郡加治木町に住み、加治木高等女学校で教師をしていた棕は、大日本雄辯會講談社の『幼年倶楽部』編集部からの依頼を受けて現地に赴いた。少年団員たちの様子を見、彼らの話を聞くなどして取材をし、この作品を執筆した。内容に合わせて掲載された写真8葉は、「（本社寫眞部 高橋良雄うつす）」（本文末尾 p.34）とあり⁽³⁾、棕が写したのではない。

この作品はその内容はもちろん企画・掲載自体が戦意高揚を目的としたものであり⁽⁴⁾、まさに「戦争協力」作品である。しかし、棕が作家としてのペンネーム「棕鳩十」ではなく、現実の時代の空気を呼吸し、社会のしがらみの中で生きる人間「久保田彦穂」としてこの作品を書いたこととともに、事実を報告するルポルタージュという作品自体の制約の中で、棕が何をどのように表現したのか、丁寧に見ていく必要がある。

2 先行研究

この作品について言及した先行研究は数としては多くない。長谷川潮、鈴木敬司、鳥越信は、棕を戦争に協力しない非戦の作家であったと考えてきたが、実は戦意高揚を目的とした作品を書いていたことについての衝撃とともに、作家論、作品そのものを見直さねばならないと問題を提起している（長谷川 1995、鈴木 1988、鳥越 2005）。この三名の論を踏まえて内山三枝子・

棚橋美代子は、横山少年団の元団員に対する聞き取り調査を実施し、作品の執筆背景（状況）について論じている（内山・棚橋 2009）。

先に触れたように、「軍神につづく横山少年団」は、読者の子どもたちに知られたペンネーム「椋鳩十」ではなく、椋の本名である「久保田彦穂」で執筆された。そのため、戦後、鳥越信が『日本児童文学史年表』（鳥越 1977）の中に久保田彦穂著として取り上げたものの、椋の作品として特に意識されないまま何年か経過した。椋の長男、久保田喬彦による追想『父・椋鳩十物語』に、『少年倶楽部』および『幼年倶楽部』掲載作品が挙げられているが、その中に「太郎のかた」はあるものの「軍神につづく横山少年団」は無い（久保田 1977 113-114頁）。当時、自分は軍国少年であったと振り返る息子喬彦にとっても、ルポルタージュ「軍神につづく横山少年団」は父、椋鳩十の作品として意識されにくいものであったと思われる。

この作品をまず正面から取り上げたのは長谷川潮である。1984年に長谷川潮は、「軍神と犠牲者のあいだ—国家の戦争像と個人の戦争像」（長谷川 1984）において、「鳥越信の『日本児童文学史年表』によれば次のような作品も書かれている。」として上げた内容未確認の六作品の最後に、「久保田彦穂（椋鳩十）「軍神につづく横山少年団」幼年倶楽部、十九年一月号」とこの作品名を挙げている（長谷川 1984 15頁）。長谷川は、軍神関連の作品を書いた作家たちの戦時下の苦慮に配慮しつつも、軍神を美化して子どもたちの戦意高揚に寄与した戦争責任を指摘している。

鈴木敬司はその後、1987年12月の椋鳩十逝去に当たり、追悼文を『文学と教育の会会報』第13号に寄せた（鈴木 1988）。この「椋鳩十の死を悼む」という二ページほどの文章の中で、長谷川の「軍神と犠牲者のあいだ」を読んで驚いた鈴木が「軍神につづく横山少年団」を入手して内容を読み、椋と同席した際に、この作品の執筆動機について椋に尋ねたことを記している。その時、椋は、「あの時代はねえ……とにかく生きることには精いっぱい……」と「苦渋に満ちた表情で」答えたという（鈴木 1988 2頁）。鈴木は戦時下の自分の行動——小学校の教員として教え子に「満蒙開拓少年義勇軍」への勧誘をした——を振り返りながら、椋が葛藤の中で「軍神につづく横山少年団」を書かざるをえなかったと推測し、本名の久保彦穂で執筆したことに注目する必要があるのでは、と指摘した。

前述の長谷川も、未見であった「軍神につづく横山少年団」を入手し、この鈴木の記述を踏まえながら、1995年に出版された『日本の戦争児童文学』第四章「九軍神という虚構」（長谷川 1995）の中で、次のように指摘する。

椋が戦争にまったく協力しなかったという認定は改めてもらわなければならないが、わたしも「軍神につづく横山少年団」だけで椋を非難するつもりはない。むしろ、椋のような人ですらそういうことがあった、「あの時代」の恐ろしさを強調したいと思うのである。

だが、忘れてはならないのは、執筆者における苦慮や葛藤がいかなるものであれ、子ども読者はそういう文章を額面通りに受け取り、感動し、自らを奮起させ、軍国少年化していったということである。(長谷川 1995 45-46頁)

鈴木はその後、『椋鳩十研究——戦時下の軌跡』(鈴木 2006)で再度このルポルタージュに言及する。椋の長男、久保田喬彦の回顧録『父・椋鳩十』を引用しながら、椋が特高に目を付けられることを恐れて昭和18年ころ大量の文献資料を焼き捨てた「焼却事件(鈴木による)」に触れ、言論弾圧の中で「軍神につづく横山少年團」が書かれたことを指摘する。鈴木はまた、この作品に衝撃を受け、「分析すべき視座を見失っている(140頁)」とまで記している。

長谷川も鈴木も、「軍神につづく横山少年團」を軍国的な戦意高揚を目的とした作品と認定し、椋の作家活動にも子どもたちへの戦争責任を認める。その一方で時代の波に押し流されてしまう一個人としての椋に配慮しているが、作品そのものについての論及は無い。

鳥越信は、長谷川や鈴木同様、椋の「非戦」意識を高く評価し、その方向で椋の人と文学について論文等を発表してきた研究者である。鳥越は「軍神につづく横山少年團」を自身が作成した児童文学作品年表に入れておきながら、この作品について意識しておらず、長谷川の指摘(長谷川 1984)で再確認した、と述べる(鳥越 2005 12-13頁)。そして、「この作品はこれまで私たちの知っていた椋鳩十の児童文学世界とは、全く異質のもの」とし、さらに「……読む人によって作品の評価は多様に分かれるのが常とはいえ、この作品に関するかぎり、これが当時子どもたちの戦意をかきたて、軍国少年化しようとする、軍国主義政府の意図を忠実に作品化したもの」(鳥越 2005 16頁)と指摘した後に、

この作品が椋児童文学にとっては大きな汚点であり、マイナスにつながるもの、という見方にも反対する人はいないだろう。そうした意味でこの作品は、椋鳩十の児童文学を研究する者にとって、^{ママ}必らず視野に入れなければならないものであり、わずか一作とはいえ、きわめて大きな意味をもったもの、ということになる。(鳥越2005 16頁)

と述べる。鳥越が先の長谷川や鈴木と同じく、この作品を再確認して大きな衝撃を受けたことをうかがわせる。ただし、鳥越は「^{ママ}必らず視野に入れなければならない」と問題提起しつつも、自らはこの作品について分析・考察を加えていない。

鳥越は、昭和40年代にポプラ社で椋の全集を編集したが、それに際し、「太郎のかた」を収録していた。内山・棚橋が指摘するように、「太郎のかた」が明確な戦意高揚的作品であることは疑う余地もない(内山・棚橋 2012)が、鳥越はこの作品については、「軍神につづく横山少年團」ほどの衝撃を受けていないようである。それは、「太郎のかた」が実録ではなく物語

であったことによるかもしれない。

内山三枝子・棚橋美代子は、長谷川、鈴木、鳥越のこの作品に対する論述について、「いずれもこの作品に対して事実確認の域を出ず」、「*「*椋鳩十研究の中でどのように位置づけ理解するかを述べるに至っていない」と批判する（内山・棚橋 2009）。そして、作品が執筆された時期や社会、椋の状況などの背景に着目し、横山少年団の元団員らへの聞き取り調査と、地方紙「*「*鹿児島日報」をはじめ多くの文献資料の調査を行い、椋のルポルタージュ成立の背景を明らかにした（内山・棚橋 2009）。上述の鳥越の姿勢（鳥越 2005）についても、内山・棚橋は「『マイナス』『汚点』とするところに、これまでの椋評価の大きな偏りと甘さがある」（内山・棚橋 2009 11頁）と指摘している。しかし、内山・棚橋の論考も、作品そのものの表現などについては触れていない。

以上のように、「軍神につづく横山少年団」に関する先行研究において、表現など作品そのものに関する論究は無い。本論考では、鳥越の問題提起を出発点とし、戦後に椋自身が述べた、戦時下における動物文学作家としての矜持をふまえつつ、このルポルタージュ作品の内容や表現について分析する。

3 「軍神につづく横山少年団」の内容・表現

「軍神につづく横山少年団」は「一」から「四」の四つの節から構成されている。

軍神の名を冠した少年団の成立と活動内容が書かれており、当然のことながら、全体に戦意高揚につながる国のためにその身を捧げることを称揚する内容と表現となっている。

「一」

「よいさ、よいさ、よいさ、よいさ」という、駆け足をする少年団員たちの掛け声から文章は始まる。続く第二段落では、特殊潜航艇による真珠湾攻撃の発表を「はをくひしぱり、こぶしをにぎって」ラジオで聞いた二人の少年（氏名は明記されていない）が、「軍神横山少佐のあとにつづいて、米英をやっつけよう」と誓う。「横山少佐のおうちに、くわいらんばんを持って行ったこともある。ほくはマッチをかひに行ったこともあるよ」と同じ町内出身の軍神とその実家に対する親近感が語られ、実家の前の清掃と八幡さまへの参拝から始まった活動が横山少年団の成立につながったことを記述する。また、団員の保護者達が少年団本部・横山道場を作り、積極的に少年団を後押ししたことにも言及する。

写真：「げんきな示現流のけいこ」「みんなそろってかけあし」

「二」

横山少年団の日々の活動が語られる。夏は朝五時に、冬は六時に集合し、宮城遙拝・準備体

操・駆け足の後、横山少佐の実家前とその付近の清掃をし、横山家の前で

「われらは、君國のために、いさぎよく眞珠灣の はなとちった、軍神横山正治少佐の日本せいしんを かたうけついで、だい二、だい三の横山少佐となるやう ふんれいどりよくします。」

と誓いの言葉を唱える。棕は、子どもたちが日々鍛錬に励む様子を紹介し、取材時に示現流の剣道の稽古をしていたことにふれ、

……横山少佐も、このけんだうで、あの てきをおそれぬ はげしいところを ねられたのです。

来るなら来てみる米英め、これこのとほり一うちだと、だい二、だい三の軍神にならうとする少年たちは、はげしい けいこをやっているました。

と記述する。

写真：「横山少佐のおかあさんの前で、だんゐんくんを とへる」「べんきやうの前に横山少佐のしゃしんに けいれい」

「三」

毎年秋に行われる「妙圓寺まわり」（往復40km）のエピソードが、横山少佐の「『さむい。』といふことも、『まけた。』といふことも、いはぬ少年」であったことと関連付けて記述され、つづけて、彼が好んだという天保山の海岸で同じように体を鍛えていることを報告する。

写真：「妙圓寺まわり」「げんきいっぱいすまふ」「たのしい舟こぎ」

「四」

横山少年團の団員で海軍少年飛行兵に志願した宅間嘉孝くんのエピソードが語られ、同じく少年飛行兵となった軸屋昭二くんとともに、日曜日に道場で団員に「勇ましい」飛行機や大東亜戦争の話をする様子を記述する。そして「ああ、たのしい少年たち、さあ、そのうで、しっかりと日本をまもってください。」と結ばれる。

写真：「宅間くんにきく、勇ましいひかうきのお話」

こうして内容や表現を見ていくと、戦意高揚の目的にふさわしく構成された文章と言える。「四」の結びの一文「ああ、たのしい少年たち、さあ、そのうで、しっかりと日本をまもってください。」は、先行する『幼年倶楽部』昭和16（1942）年6月号の「太郎のかた」で、太郎に向かって民泊した兵隊が言う「（植民地化により拡大する）日本がぐっと、かつがれるような、ぢやうぶな かたをつくらなくては、いけないな。」という表現にも通じるものがあり、戦争協力を目的とする作品であるのは明らかである。

その一方で、椋がこれまで書いてきた作品と比較すると、いくつかの違和感がある。その一つは、既に長谷川らが指摘した、ペンネームではなく本名の「久保田彦穂」でこの作品を執筆したことだが、さらに「母」の存在の希薄さについては一考を要する。

もちろん、この作品はそれまで椋が発表してきた動物文学とは全く異なるルポルタージュであり、少年団の活動報告が主題なので、「母」の存在は二の次、三の次であって当然である。しかし、前稿（阿部 2018）で確認したように、「母」の子どもを守ろうとする強い愛は、椋の大きなテーマである。また、生涯にわたり母と子の読書運動を推進した椋は、常に「母」の存在を意識している。にもかかわらず、椋は、このルポルタージュに「登場」する二人の「母」について、一人については沈黙させ、もう一人については全く言及しなかった。沈黙する「母」は、第四節の宅間嘉孝くん（副団長）の母、そしてもう一人は p.29 の写真「横山少佐のおかあさんの前で、だんめんくんを となへる」の中に写っている軍神の母、横山タカである。

4 「軍神につづく横山少年団」における「母」

椋は、第二次世界大戦後に何度か自分の作家姿勢について書いている。前稿（阿部 2018）にも挙げた『びわの実学校』88号「処女作の頃」（椋 1978）に寄せた文章をここでも引用してみる。

……しかし、言論統制のきびしい時代である。子どもの物語といっても油断はできない。

書く以上は、自分の気持ち、自分の考えを盛りこまなかったら、筆を絶ったほうがよい。自分の思うことを、こういう時代に、書ける方法、それを考えなければならない。このことは、しかし、案外、すらすらと頭に浮かんできた。

野生動物の習性にことよせて、描いたら、文句のつけようはなかりうと思った。戦争がますます烈しさを加えていき、戦死者が、毎日毎日、白い布につつまれて帰ってくる時代であったので、私は、動物の習性にことよせて、戦地、すなわち死に向かって、召されていく若者の背後に何があるのか。ということ、動物の母子の深い愛情で暗示しようと思った。また、死を賛美する時代であったので、動物どもが、あらゆる場面で、生きのびる美しさを暗示的に描こうと考えた。こんな風にして、初めて書いたのが、昭和十三年、少年倶楽部^{ママ}に発表した「山の太郎熊」であった。（椋 1978 31頁 下線は論者による）

椋が戦時下で発表した動物文学作品の多くに母親が登場する。前稿で取り上げた「嵐を越えて」でも、燕がやってきた家で母と子のささやかな会話が描写され、「母」が作品の中で重要な役割を持っていることを指摘した（阿部 2018）。一方、「軍神につづく横山少年団」では、

上記のように少年団の副団長宅間嘉孝の母、「軍神横山少佐」の母（タカ）がひっそりと存在する。

4-1 沈黙する「軍神につづく」少年の母……宅間嘉孝くんの母

第四節の冒頭は次のように始まる。

「おかあさん、ぼくは横山少年団の副団長です。まづだい一ばんに、軍神につづいて、みなにおてほんをしめします。」

と、海軍少年飛行兵をしぐわんした嘉孝くんは、横山少年團本部とかいた 札のかかってゐる宅間さんのおうちの、たった一人の男の子です。嘉孝くんは、しけんが うかった時、「おかあさんに、いよいよ東京けんぶつをさせてあげることができますよ。」

と、いったので、おかあさんが ふしぎさうな かほをなさると、

「それ、ぼくが靖國神社にまつられたらおかあさんも、おまゐりに行けるではありませんか。」

と、にっこり笑ったとのことでした。

内山・棚橋によると、宅間嘉孝くんの父嘉吉氏は市会議員を務めた人物である。資産家でもあり、何軒か持っている貸家の一軒を少年団の道場として開放していたという（内山・棚橋 2009 13頁）。その関係で、宅間氏宅が少年団の本部を引き受けていたのだろう。

さて、ここで棕は、「宅間さんのおうちの、たった一人の男の子です。」と記した後に、嘉孝くんが東京見物をさせてあげられると言って、母を不思議がらせたエピソードを続ける。海軍飛行予科練習生に合格したばかりの少年は、もはや、軍神につづく＝戦死する＝靖国神社に祀られるという自分の人生を確定的なものと捉えている。これは戦時下の空気からは想定内の発想ではあるが、自身も男の子たち（しかも、棕に軍国的な作品をねだる）を育てる棕、後述するように、子どもたちが戦地に赴くことを恐れ心を痛める棕にとって、実際には衝撃的なエピソードだったと考えてよかろう。一見すれば、「軍神につづく横山少年團」の副団長にふさわしい「お国に命を捧げる」エピソードを書き込むことは戦争協力に直結する。しかし、ここで棕は、「宅間さんのおうちの、たった一人の男の子です。（下線は論者による）」という表現を挟みこむ。さらに、不思議そうな顔をする母に対し息子が、戦死し英霊として靖国神社に祀られることで母が遺族として東京に行ける、と謎解きをしたその言葉に、母がどのように反応したか全く書き込まなかった。

「軍神につづく横山少年團」より先に『幼年倶楽部』に掲載された他の作家の作品の中で、言葉を発していない母の例を一つ挙げて見てみよう。

『幼年倶楽部』第17巻1号（昭和17（1942）年）に「わが日本 米英とたたかふ」⁽⁵⁾を書いている加藤武雄の「國をまもる子ども」（寺内萬治郎 画）は、昭和15（1940）年から『幼年倶楽部』で連載された作品である。初回の第15巻11号では、主人公勇吉の父に召集令状が届く。父は『おそかつたぞ。まちかねてゐたのだ。…（中略）…こうちやうできたへたこのうで、うちまくつてやるぞ。きりまくつてやるぞ。』と好戦的な発言の後、勇吉と妹に留守を頼む。二人の『やります。おとうさん。』『わたしも、お父さん』と言う「たのもしい」様子を見ている母は、「にこにことわらつてゐました」と表現されている。一家の稼ぎ頭である夫が出征すると、経済的にも行き詰る。実際、長男をよそに預けて田舎に行く案も考えている。また、夫が無事に帰還する保証は全くない。その状況下でけなげに明るく、お国のために前向きに夫を送り出して子どもたちをしっかりと育て上げる意思表示が、この「にこにことわらつてゐました」に込められている。この親子の会話の中で母は何も発言していないが、この笑顔によって夫と子どもたちの上記の会話を積極的に肯定する、「軍国の妻」「軍国の母」らしい描写となっている。

前稿（阿部 2018）において、燕を主人公にした椋の動物文学「嵐を越えて」に登場する出征軍人の母の「静かな聲」について論じた。前稿ではこの「静かな聲」の母と、軍国の母の典型とされて実話から多くの作品がつけられ、小学校の教材ともなった「一太郎やあい」の母を比較検討した。実際に「一太郎」のモデルとなった息子に向かって母が叫んだのは「オカアは待つて居るぞよ」「しつかりやって来いよ」「出征（「出世」の誤解か）して帰れ」⁽⁶⁾であったが、何人もの作家によって作品として書かれる中で、素朴な息子への激励が「名誉の戦死をして来い」⁽⁷⁾といった激烈な文言に変容してしまう。一方、「嵐を越えて」の母の「静かな聲」は母のさまざまな思いを言葉の中に沈殿させ、多様な読みを包摂する。

一方「軍神につづく横山少年團」の母の「沈黙」は、静かな声で語るべき言葉さえ失っている状況をも含む。静かな声であっても「そう」「そうですね」と母に応答させてしまえば、一人息子の「東京けんぶつをさせてあげる」＝お国のために殉死して靖国神社に祀られる、という、死を前提とした言葉の肯定になってしまう。何人も男児を育てていても、一人ひとりしかけがえのない我が子である。さらに「たった一人の」という表現が入ることによって、戦死を前提に少年航空兵合格を喜んでいる息子のエピソード、お国のために命を捧げるという戦意高揚の言挙げに夾雑音を生じさせる。一人息子が、戦死することで母に「鹿児島から東京見物に行かせる」という親孝行をする、その不条理が文章の中に紛れ込む。

椋自身の息子たちも、宅間嘉孝くんと同じく戦時下の教育の中で軍国的な考え方に染まっていた。長男喬彦は『父 椋鳩十』の中で、「軍国少年だった私たちは、『敵中横断三百里』のような、血わき肉おどる戦争ものを要望、兵隊さんのことを書かない作家は、非国民と見られるなどと生意気なことをいった記憶も残っている（久保田 1997 113頁）」と述べている。

しかし、椋が動物文学を書き始めた根底には、既に引用したように、戦争が烈しさを増して

戦死者の無言の帰郷が続く中、「死を賛美する時代であったので、動物どもが、あらゆる場面で、生きのびる美しさを暗示的に描こう（椋 1978 31頁）」という考えがあった。

また、戦後椋は『日本児童文学』昭和44（1969）年2月号の「私と動物文学」において、

……何年かすれば、私の幼い子どもたちも、戦争にかりだされるであろうという時代であった。老いも若きも、死ぬことが名誉であり、敵を殺すことが名誉の時代であった。死ぬことと殺すことが、日本を、おおいつくそうとする時代が目の前に来ている時代であった。

いが栗坊主の自分の子どもたちが、無邪気に学校に出て行くのを見送りながら、やがてくる時のことを考えて、心を痛めるのであった。（椋 1969 47頁）

と述べている。昭和5年（1930）生まれの椋の長男喬彦は、椋が横山少年団を取材した昭和十八年（1943）当時、13歳である。少年飛行兵となった宅間嘉孝くんの言葉は、椋自身の息子たちと重なり、かけがえのない息子たちを戦火の下に失うことを恐れる、父親として一個人としての椋、生身の「久保田彦穂」に突き刺さるものであったことは想像に難くない。

椋に宅間嘉孝くんのエピソードを語った人物は不明であり、軍国的な母自身が息子について誇らしげに語った可能性もある。しかし、お国に命を捧げる戦時下らしい勇猛な話が、母の言葉や反応を全く書かないことによって別の読みを含む表現に転換する。

なお椋は、このルポルタージュ冒頭の少年団発足の部分で登場する少年二人の名前は書かなかったが、この「宅間嘉孝くん」と「軸屋昭二くん」のみ実名で書きこんでいる。これも椋の何らかの意図があったのかもしれない。

4-2. 登場しない「軍神の母」……横山タカ

第二節の写真キャプションに登場する横山タカは、口絵写真「横山少佐のおかあさんの前で、だんゐんくんを となへる」の中でこちら向き（団員たちはタカに向かって立っているの、皆後ろ向き）に写っているが、椋は彼女についてまったく言及していない。

日清、日露戦争以降、軍国美談がしばしば語られ、そこには、前稿でも触れた「一太郎やあい」など「軍国の母」を称揚する物語や表現が積極的に採用された⁽⁸⁾。国家により特定の戦死者に対して「軍神」という概念が導入されたとき、この「軍国の母」の究極の存在として「軍神の母」という存在が意識され、我が子を強い若者に育て上げてお国に捧げた強い母の亀鑑、戦意高揚のアイコンとして取り上げられることになった。〈強い母〉は、戦争美談の大きなテーマであった。横山少佐の母タカに関する報道も、〈強い母〉を強調する表現がみられる。

軍神となった横山正治の母であるタカの名前は、正治の戦死以降様々なメディアに登場する。例えば読売新聞のデータベース「ヨミダス歴史館」によると、九軍神の合同海軍葬に参列

する遺族動向（東京到着の様子 1942年4月7日朝刊）から始まって、いくつかの記事にタカの名前が掲載され、「軍神の母」として全国にその名前が知られていく。恩賜財団軍人援護会の第五回“誉の家”表彰の記事（1943年9月28日朝刊3頁）でも、「今回表彰の荣誉に浴するのは真珠灣の若櫻と散つた軍神横山正治海軍少佐とその令兄正一郎氏を御國に捧げた母堂横山タカさん（鹿児島市下荒田町）以下九百六十二家庭」とあり、個人名が上がっているのは、タカだけである。

当時の内閣総理大臣東条英機が昭和17（1942）年3月に横山家を訪れて、タカに面会するなどしている。また、青少年団軍神敬頌団による軍神の生家訪問企画により、同年8月に東京青少年団軍神敬頌団が横山家を訪問した。これらの記事は讀賣新聞（4月6日夕刊）など全国紙に載り、タカの言動について、これぞ「軍神の母」といった取り扱いがなされている。

横山正治以外の「軍神」たちに関する伝記風読物や実家訪問団の記述などにおいても、母親に関する記述が多く、父の存在は印象が薄い。「軍神の母」と題する著作物も多い。例えば、真珠湾攻撃で横山正治の艇に同乗した上田定兵曹長の母を描くものでは、昭和17（1942）年刊の、吉尾なつ子による『軍神の母』、紙芝居『軍神の母』（鈴木紀子作 野々口重画、日本教育紙芝居協会制作）などがある。後者は日本教育紙芝居協会理事（兼主事）砥上峰次著『紙芝居實演講座』にも良い紙芝居として収録されたもの⁽⁹⁾で、日本全国で実演されたという⁽¹⁰⁾。上田定の両親は健在だったが、内容は母を称揚するもので父の影は薄い。

このような「軍神の母」たちは、「一太郎やあい」の母のように作品やメディアに作りこまれることで社会の中で積極的に戦意高揚のアイコンとして利用されている。当時の社会状況を踏まえると、「軍神につづく横山少年團」第二節の横山家の前で団員訓を唱える場面について、「横山少佐のおかあさんが頼もしそうに見守る」などタカに軽く言及していてもおかしくない。「軍神の母」たちが果たした（押し付けられた）役割や「軍神の母、横山タカ」の全国的な知名度を考えると、この文章を戦意高揚のために書こうとするならば、地域の著名人でもあるタカの名前を積極的に利用したであろう。しかし、椋はこの「軍神の母」について一言も触れなかった。「軍神の母」に言及することは、先に引用した椋の動物文学の原点である「戦地、すなわち死に向かって、召されていく若者の背後に何があるのか。ということ、動物の母子の深い愛情で暗示」（椋 1978 31頁）し、動物が生きのびる美しさを暗示的に描こうとする自らの作家としての矜持に背くことであったからではなかろうか。

なお、早朝（夏は五時、冬は六時）に横山家の前で団員訓を唱和する少年団の様子をカメラマンが撮影した時、椋が居合わせなかった可能性はある⁽¹¹⁾。

だとしても、当時の日本社会に広く知られている軍神の母、鹿児島市周辺では当然その存在を知られている横山タカに全く触れていないことには違和感がある。

5 ルポルタージュの題名について

最後に、このルポルタージュの題名についても問題提起しておきたい。少年団結成の経緯を述べる第一節、最初に自発的に活動を始めた二人の行動から他の少年たちの賛同が広がる部分に、「ほくも、軍神のあとにつづくのだ。(下線は論者による。以下同じ。)」という表現があり、これが題名の「軍神につづく」に連動する、と読むのが自然かもしれない。しかし、掲載された写真のうち、p.30「べんきやうの前に横山少佐のしゃしんに けいれい」、p.34「宅間くんにく、勇ましいひかうきのお話」には、床の間らしき所に掲げられた「軍神につづけ」と大書された紙が写っている。少年団として掲げるこの文言をそのまま題名に反映させ、「軍神につづけ 横山少年団」とすることも考えられる。しかし、椋は題名を「軍神につづく横山少年団」とした。「つづけ」ではなく「つづく」としたのは椋の精一杯の表現とも読み取れる。「つづけ」という命令形ではなく、「つづく」とすることで、既に横山少佐につづく気持ちで子どもたちが活動している事実に沿う表現となる。少年団本部に掲げられている「つづけ」という命令形をそのまま使ってしまうと、書き手である椋自身が、少年団の子どもたちだけでなく、読者の子どもたちに対して積極的に「お国のために死んで来い」と言ってしまうことになりかねない。「つづく」という言葉遣いは、それを避けた表現だったと考えられる。

終わりに 戦争責任と作家としての椋の苦渋—本名での執筆

この戦争協力のルポルタージュの執筆は、椋にとって、いくら後悔してもしきれないことだっただろう。「軍神につづく横山少年団」の後、モグラを描いた1947年発表の「暗い土の中でおこなわれたこと」⁽¹²⁾まで、椋は童話、ルポルタージュ、そして動物文学さえも、発表していない。確かに、戦争末期の紙不足のため出版もおぼつかない社会情勢であり⁽¹³⁾、この年に学徒動員で高等女学校の生徒たちを引率して長崎の海軍工廠へ赴いたとはいえ、昭和18(1943)年には『少年倶楽部』に「栗野岳の主」「三郎と白い鷺鳥」、『幼年倶楽部』に「ツンドラのツル」「ヘイケドリとタイ」が掲載され、昭和17(1942)年にも両誌合わせて六作品、昭和16(1941)年には同じく六作品発表した椋が、三年もの間、作品を書かなかった(発表しなかった)ことは、椋の葛藤を表わしていると考えられる。

戦争協力のルポルタージュを書いた以上、椋自身の、読者の子どもたちに対する戦争責任は免れない。本名である「久保田彦穂」での執筆は、長谷川潮(1995)や鈴木敬司(1988)が記すように、椋自身が戦意高揚のために作品を書かざるをえない状況に追い込まれ、作家ではなく時代に翻弄される市井の一国民として書くという決断をしたためであろう。

市井の人としての椋は、初期の大人向けの作品が伏字だらけになり、特高に目を付けられる

恐怖を経験している。本論文の第二章で触れたように、「軍神につづく横山少年團」を取材した昭和18年には、大量の書類を焼き捨てている。「皇国ノ道ニ則リ国民文化ノ基礎タル日本少国民文化ヲ確立シ以テ皇国民ノ錬成ニ資ス」べく昭和16（1941）末に設立された少国民文化協会にも所属せざるをえず、作家たちへの統制も肌身を感じていただろう。大日本雄弁會講談社は、大政翼賛的な色合いが濃い出版社であり、その点は椋自身も飲み込んで執筆していたはずである。このような戦争協力的な作品依頼が来る可能性も意識していたと推測できる。特にこの作品は住居近隣の鹿児島市での取材、執筆でもある。状況から考えるに、動物文学執筆の最初からずっと世話になっている大日本雄弁會講談社、『幼年倶楽部』編集部からの依頼に対して、椋がこのルポルタージュを書かない選択はなかった。

しかし、椋にとっては、「太郎のかた」「軍神につづく横山少年團」を書いてしまったのは彼自身が言う「臆病」のなせるわざだった。

前稿（阿部 2018）でも触れたが、椋が戦後雑誌などに書いた戦時下での動物文学執筆の回想は、早い時期のものには自虐的な表現が見られる。児童文学者協会の雑誌『日本児童文学』昭和44（1969）年2月号特集《私の動物文学》に寄せた「私と動物文学」と題する文章で椋は、「動物と私の結びつきは、臆病者のかくれ家といった関係（椋 1969 46頁 下線は論者による）」と書き始める。そして、文章の終わりの方では

しかし、これは、私にとっては「何の自慢にもならぬ話である。なぜなら、動物の生態という、カクレミノのかげにかくれて、「いのちの歌」を、唄ったにすぎないから……。私というものの臆病が、させたことにすぎないから……。そしてまた、須藤憲三という編集者がいなかったら、おそらく私は、動物文学などに、手をそめなかっただろうから……。後略）（同 48頁）

と、「……」を多用し、「すぎないから……」を繰り返す。そのうえ、この文章を「とんだ恥さらし」とまでいう。これらの表現には、後年、鈴木敬司が「軍神につづく横山少年團」執筆動機について尋ねた時、「苦渋に満ちた顔」で「あの時代はねえ……。とにかく生きること精いっぱい……」（鈴木 1988）と述べた椋の心情と重なるものがあると考えてよからう。

前稿で指摘したように、上記の《私の動物文学》以降に書かれた椋のいくつかの回想からは、上記の「後ろめたさ」や「苦渋」の色合いが薄れていく。世間から戦争協力者として糾弾されることなく日を重ねていったことで、安堵し、過去を無かったことにしたい気持ちはあったかもしれないが、戦時下での自らの著作活動を総括して、自身が作品で何を書きたかったのかを再確認していった結果ともいえる。しかし、当然その再確認は、戦時下のどうしようもない状況の中とはいえ、書きたくなかったものを書いてしまったことの確認につながる。この後ろめ

たさを、棕は終生抱えて行かざるをえなかったのではなかろうか。

しかし、「軍神につづく横山少年團」は戦意高揚のためのルポルタージュとはいえ、棕は時代の荒波の中で、作家としての自分の信条をわずかでも守ろうとした。たとえ、「子どもたちが自らを鍛え、成長してお国のために命を捧げる」というルポルタージュの方向性は曲げられずとも、文章の表現に、あるいは表現しないことによって、軍国的な読みに通奏低音のようにある種の違和感やずれを生じさせている。それは、大半の読者に読み過ごされるかもしれないが、読後感の中に違和感や引っ掛かりを残す可能性を秘めている。論者は、それこそが、究極の「自分の思うことを、こういう時代に、書ける方法」（棕 1978）であったと考える。

従来、戦時下の文学作品について論じるとき、戦争協力か反戦非協力かどちらか、という論点が多かった。戦争協力的であれば、それを槍玉にあげるような論調も見られる。しかし、大きな時代の流れに翻弄される人間のありようや、実際に論じる研究者自身が同様の状況下でどう振る舞えるのか、という自省も含めて論じるべきである。二項対立的な把握では作品を深く理解できないのではないだろうか。今回取り上げた「軍神につづく横山少年團」は戦争協力の作品であることは明らかである。しかし、鳥越（2005）のように「汚点」と一刀両断にしてしまうと作品の読みはそこで止まってしまう。戦後、このルポルタージュの執筆について尋ねられ「苦渋に満ちた表情」で口ごもってしまった棕が、戦時下で、生身の人間として「苦渋」の選択の中でこのルポルタージュを構成し表現したことを、改めて指摘したい。

注

- (1) 棕鳩十「私と動物文学」『日本児童文学』特集：動物文学《私の動物文学》昭和44年2月号 盛光社 1969 46—48頁、棕鳩十「私の処女作」『日本児童文学』昭和48年8月号 盛光社 1973 118—119頁、棕鳩十「処女作のころ」『びわの実学校』88号「わたしの処女作第十五回」びわの実文庫 1978 30—31頁。
- (2) 1942年8月6日夕刊、2頁中央上。連載記事「軍神敬頌團・生家訪問第四報」。見出しには、大きく「孝養の布哇土産」小さく「コーヒーに偲ぶ母堂の慈愛」とある。ヨミダス歴史館による。
- (3) 丸くフレーム処理された「妙圓寺まゐり」の写真については、カメラマンの撮影ではなく、少年団関係者から提供されたものかもしれない。
- (4) 『幼年倶楽部』昭和43年12月号の73頁「新年號ノオシラセ」には、「ミナサン、幼年倶楽部ノ新年號ニハ、勇マシイお話ヤ エガ タクサンアリマス。」として「◎勇マシイ日本陸軍……北 宏二 ◎軍神につづく横山少年團……久保田彦穂（後略）」とある。
- (5) 「昭和十六年十二月八日、アメリカ、イギリスにたいする宣戦の詔勅が はつせられました。わが国のおく^{ミナ}の國民は、わつと喜^{ヨロコ}の聲をあげて、いさみたち、ふるひたちました。」と書き始める。戦争の正当性を叫び、子どもたちにお国に尽くすよう呼び掛ける内容となっている。

- (6)「國語讀本所載時候の原拠に関する香川県の通牒」(1921年11月3日)『文学時報』57号の参考欄。中内敏夫『軍国美談と教科書』岩波書店 1988の、72-73頁所収記事による。
- (7)米山露花「一太郎やあい」『童話新集 桃色のお家』中村書店 1924。
- (8)中内敏夫『軍国美談と教科書』岩波書店 1988 72-73頁。
- また、紙芝居などにおいても軍国の母を描く作品が多く作られ、演じられている。
- (9)砥上峰次は、『紙芝居実演講座』の中で紙芝居『軍神の母』に解説を付けているが、この21枚目の部分の解説で、「俗に謂ふよい後味を残した作品である。此の作品の実演によつて得た感激感銘ははでな一時の興奮や観劇でなく永く脳裡に残る。」と高く評価している。
- (10)砥上峰次 前掲書 50頁。
- (11)当時高等女学校の教員であつた椋は、休日の日曜日に加治木村から鹿児島へ日帰りで取材に行つたと推測できる。四節からなる「軍神につづく横山少年團」の文章を吟味していくと、第二節で椋は「私がたづねて行つた時は、^{しげんりゅうママ}示現流といふけんだうを、げんきにやつて ぬるところでした。」と記述している。これはは、椋が取材に行つた時、まず目にしたものから記述したと考えてよいだろう。実際に椋が訪ねた時、写真にあるような横山タカに向かって団員訓を唱和する少年団員たちの早朝の活動は既に終わった後で、椋自身見なかった可能性はある。第四節の宅間嘉孝と母のエピソードの記述は、文章の流れから、椋が取材時に誰かから聞き取ったものをもとにしていてと考えられる。
- なお、内山・棚橋によれば、写真「宅間くんにくく、勇ましいひかうきのお話」の予科練の制服は、軸屋昭二氏への聞き取りから冬服と判明しており、10月から12月頃までの間の取材と考えられる(内山・棚橋 2018)。
- (12)児童文学雑誌「銀河」所載。
- (13)椋が戦時下の作品多くを発表した『少年倶楽部』『幼年倶楽部』を発刊していた大日本雄弁會講談社も、昭和19(1944)年春の出版界企業整備の中で『コドモエバナシ』、『幼年倶楽部』を3月号で打ち切った。「海軍」などの新雑誌も創刊したものの、用紙不足により各紙の頁数を減らした。また、定期刊行もおぼつかない状況にあったことを社史(講談社 1959)で確認できる。

参考文献

- 阿部奈南 「戦時下児童文学における椋鳩十の作品構成と表現——『少年倶楽部』掲載の「嵐を越えて」をめぐって——」関西外国語大学、『関西外国語大学研究紀要』107号、2018年 139-154頁。
- 内山三枝子・棚橋美代子 「椋鳩十作「軍神につづく横山少年團」成立の背景に関する資料」京都女子大学発達教育学部紀要第5号、2009年、11-20頁。
- 内山三枝子・棚橋美代子 「椋鳩十作「太郎のかた」に関する一考察」京都女子大学発達教育学部紀要第8号、2012年、69-77頁。
- 加藤武雄(寺内萬治郎 画)「國をまもる子ども」『幼年倶楽部』第15巻11号、大日本雄辯會講談社、

- 1940年、94-105頁。
- 神奈川大学日本常民文化研究所火文字資料研究センター 「戦時下日本の大衆メディア」研究班（代表 安田常雄）『非文字資料研究叢書1 国策紙芝居から見る日本の戦争』勉誠社、2018。
- 久保田喬彦 『父・椋鳩十物語』理論社 1997年。
- 講談社社史編纂委員会 編 『講談社の歩んだ五十年 昭和編』講談社 1959年。「昭和十八年」509-521頁。「昭和十九年」525-542頁。
- 佐藤広美 「児童文化政策と教育科学 内務省「児童読物改善ニ関スル指示要綱」（1938年10月）をめぐって」東京都立大学『人文学』28号、83-118頁、1993年。
- 鈴木敬司 「椋鳩十の死を悼む」文学と教育の会『文学と教育の会会報』第13号、1988年、1-3頁。
- 鈴木敬司 『椋鳩十研究 戦時下の軌跡』菁柿堂、2006年。
- たかし よいち 『椋鳩十の世界』講談社 1982年。
- 砥上峰次 『紙芝居実演講座』慶文堂書店、1944年。
- 鳥越信 『日本児童文学史研究』風涛社 1971年。
- 鳥越信 『講座児童文学 別巻2 日本児童文学史年表 2』明治書院、1977年。
- 鳥越信 「椋児童文学研究の新しい局面を迎えて」椋鳩十文学記念館『紀要 椋鳩十・人と文学』第10号、2005年、12-18頁。
- 中内敏夫 『軍国美談と教科書』岩波新書、1988年。
- 西本鶏介 『西本鶏介児童文学論コレクションⅡ』ポプラ社 2012年。
- 長谷川潮 「軍神と犠牲者のあいだ」児童文学者協会『日本児童文学』第30巻8号、盛光社、1984年、14-21頁。
- 長谷川2000に再録。
- 長谷川潮 「4章 九軍神という虚構」『日本の戦争児童文学』久山社、1995年、37-43頁。
- 長谷川潮 日本児童文学史叢書21『児童戦争読物の近代』久山社、1999年
- 長谷川潮 『長谷川潮・評論集 戦争児童文学は真実をつたえてきたか』梨の木舎 2000年
- 平澤薫 「児童読物調査について—中間報告—」『新児童文化』第1冊、有光社、1940年、289-298頁
- 椋鳩十 「私と動物文学」『日本児童文学』昭和44（1969）年2月号特集〈私の動物文学〉、日本児童文学者協会、盛光社、1969年、46—48頁。
- 椋鳩十 「私の処女作」、児童文学者協会『日本児童文学』19巻9号、盛光社、1973年、118-119頁。
- 椋鳩十 「処女作の頃」『びわの実学校』88号、びわの実学校編集室、1978年、30-31頁。
- 椋鳩十・鳥越信 「対談 自然に生きる——椋鳩十の起点」日本児童文学者協会 編『日本児童文学』26巻8号、1980年、12—28頁。
- 椋鳩十 『椋鳩十の本』第27巻『本のすすめ 読書随想と対談』理論社、1989年。
- 文部省社会教育局 「戦時家庭教育指導要領」1942年5月公布、湯沢雍彦 『日本婦人問題資料集成第五巻 家族制度』479-482頁による。
- 山中 恒 『戦争児童文学論』大月書店、2010年。
- 山中 恒 『少国民戦争文化史』勁草書房発売、辺境社発行、2013年。

阿 部 奈 南

吉尾なつ子 『軍神の母』三崎書房 1942年

ヨミダス歴史館 <https://database.yomiuri.co.jp/about/rekishikan/> 2022/10/22最終閲覧

(あべ・なな 短期大学部教授)